

平成16年度(2004年)

海外行政視察報告書

(アメリカ・カナダ)

平成16年10月10日(日)~18日(月)



美しい町並みのジョージタウン市街

田 原 市 議 会
海 外 行 政 視 察 団

目 次

巻頭あいさつ	1
視察調査レポート	2
序段	2
ジョージタウン市内のスポーツ施設を視察	2
ジョージタウン市長表敬訪問	3
ジョージタウン市商工会例会出席	4
日本庭園視察（友好園）	4
シェーカー・ビレッジ視察	4
トヨタ自動車インディアナ工場視察	6
インディアナ州プリンストン市表敬訪問	7
プリンストン市内の高校視察	8
ニューヨーク市の高齢者福祉視察（ハブライ・ホーム）	8
スーパー視察（スチュレカート 3号店）	10
ニューヨーク市の街づくり視察	11
トロント市の街づくり視察	12
ピリテリー農場視察	13
ナイアガラの滝視察	15
田原市議会海外行政視察日程表	16
田原市議会海外行政視察団名簿	17
編集後記	18

巻頭あいさつ

田原市議会海外行政視察団

団 長 伊与田 知 養

日本の政治と経済は、1989年バブル経済が崩壊し、それ以降混乱と低迷が繰り返されてきた。小泉内閣の誕生で政権は安定し、経済指標も好転を見せてはきたが、デフレ対策に終結宣言がない。また、テロ、イラク戦争への対応では国連の機能が果たせず不安な要素も多い。

田原市においては長期にわたり財政に恵まれ事業推進が図られてきた。これは、トヨタ自動車が進出以来、国内ベースに北米をはじめとする世界戦略に成功、関連企業を含めた好業績によるところと、農業日本一といわれる農産業が大きく寄与している。

一方、国の政策、三位一体の改革にも積極的に取り組み、市町村合併を推進、赤羽根町に続いて渥美町との合併も間近い。地方の時代到来である。まちづくりは、10年、20年、いや長期の展望が重要となる。今後どうあるべきか、どんな政策をなすべきか。

この際、田原市議会海外行政視察団一行は、政治、経済、文化、教育、福祉など関連が深く、動向いかなでは影響力の最も大きい北米の実情をこの目でしっかりと見聞きたい。幸いにして、アメリカは大統領選挙終盤戦という好機に訪れることになった。

目的地は、姉妹都市ジョージタウン市と友好都市プリンストン市を表敬訪問、施設、学校、商工会、トヨタのケンタッキー、インディアナ両工場の視察と懇談、経済の中心地ニューヨーク市のマーケット、福祉施設の視察、カナダのオンタリオ州議事堂、まちづくり、農業マーケット、観光保養施設の視察をした。

視察調査レポート

【序段】 10月10日：PM

我々海外行政視察団は、伊与田知養団長（現副議長）はじめ、議員9人と職員1人を含む10人で田原市との姉妹都市提携をしているジョージタウン市を最初に訪問した。訪問にあたっては、以前田原市（田原町の時）にALTとして派遣されていたケリー・マキューエンさんが出迎えてくれた。



ケリー・マキューエンさん（左から3人目）と
クーパー・由紀さん（左から4人目）

【ジョージタウン市内のスポーツ施設を視察】 10月11日：AM

早朝、宿泊先のホテルに通訳として来てくれた、クーパー・由紀さん（田原市出身）と合流し、ジョージタウン市郊外にあるスポーツ施設を視察した。

施設の館長であるウィリアム・パーカーさん（女性）の説明では、当施設は、市内にある中央銀行の土地10エーカーを寄付で受け、800万ドル（日本円8億円強）で施設を建設した。毎年の運営費は75万ドルとなっており、運営費の75%は使用料から、残りの費用は郡と市からの補助金となっている。いわゆる日本でいう第三セクター方式であるが、日本とは違い何から何まで行政まかせでなく、施設管理運営をしっかりと捉えた考えをもっている人（人材）を充て、施設運営をしていた。

施設内には、体育館（バスケットボールコート2面）、ウォーキングトラック、フィットネスルーム、プール、レジャープール、託児施設などがある。特にプールの温度調節は、水温のままの温度から太陽光での温度調整、最終的にはボイラーの温度調整となっていて、田原市のセントファールにあるスポーツ施設のプールとは光熱費について差がありそうだ。しかしプールの消毒に使う塩素がきつく鼻がツンときそうなところもあったが、おもしろい施設（プール内）も数多くあった。



施設内の温水プール

次に体育館を視察したが何の変哲もない体育館ではあったが、特に床板は楓(メイプル)の木でできていて、頑丈で安価とのことで、ここにもアメリカのなせる技が生かされている。

また、施設内の託児施設では、子どもを預かることができるため、子ども連れでもスポーツを楽しむことができる。

今後、田原市にもプール、体育館、(運動公園)の建設予定があるが、その点でも参考となる施設であった。



メイプルの木材を床に使用した体育館

【ジョージタウン市長表敬訪問】10月11日：AM

ジョージタウン市のエバレット・バーニー市長にお会いし、市庁舎で温かく迎えてくれた。伊与田団長より、表敬訪問のあいさつ後、白井田原市長からのメッセージを伝え、来る2005年の愛知万博の開催にあわせ、是非田原市においていただきたい旨を伝えた。



バーニー市長と一緒に(市長室にて)

バーニー市長も笑顔で我々一行を迎えてくれた。市長の笑みの奥には田原市とジョージタウン市の両市民の信頼に立ったものだと感じさせるものがあった。

街は月末に開催されるハロウィンの身支度で、各店先や住宅地の軒先はかぼちゃの顔とわらで飾られていて、より一層のアメリカという国を初日に感じた。

8年前に訪問した議員もいたが、ジョージタウン市の発展ぶりに昔の田原を感じるとのコメントもあったほど変貌していた。また訪れる日が楽しみである。



ジョージタウン市庁舎

【ジョージタウン市商工会例会出席】 10月11日：PM



伊与田団長のあいさつ(トヨタビジターセンター内)

トヨタのケンタッキー工場内にあるビジターセンターで、ジョージタウン市の商工会の例会に特別ゲストとして参加し、田原市と姉妹都市提携時の市長であり、現商工会の会頭のトム・プレイサーさんから温かいスピーチで我々を紹介していただき、そして大きな拍手で歓迎された。

例会では伊与田団長のスピーチ後、商工会主催の昼食会となった。

【日本庭園視察（友好園）】 10月11日：PM

ジョージタウン市の日本庭園（友好園）では、「渡辺崋山」没後163年の今日この日、大理石に地元マリアン・ガタさん（女性）の製作で、崋山16歳の立志の頃の場面が刻まれたプレートの除幕式に立会い、全くの偶然で、市民及び市の関係者も我々の参加を喜んでくれた。

その後、我々視察団にガタさん作品の、立派なパッチワーク（キルト）と日本人には祝う言葉の“めでたい”にちなんで、魚（鯛？）のオブジェをプレゼントされた。

また庭園内を見学中に、地元の高校生が「こんにちは」と日本語を使い我々に寄ってきた。そして、生の日本語を聞いて恥ずかしそうに会話を求めてきた。

手厚い歓迎に、なおさら田原市との友好が深まった秋のジョージタウンであった。



崋山立志のプレートの除幕式

【シェーカー・ビレッジ視察】 10月11日：PM

シェーカーの名前が付いた由来は、コミュニティーの霊的なセンターである集会所で礼拝が開かれ、グループは身体をゆさぶったり、ぐるぐる旋回して踊って信仰を表現したところから名づけられた。

この施設は1960年に歴史保存され、敷地面積は2,170エーカー（約9平方キロメートル）の緑に囲まれた静かなところにあった。



手桶を作る木工芸品屋

シェーカーの人たちは、1800年代の初めにイギリスから渡ってきて、ケンタッキー州のプレザントヒルに村をつくった。シェーカーの人たちは協力して、家から日用品、家具、農具にいたるまで全て自分たちで作り、自給自足の生活をしていた。

現存する建物は24棟あり、杉の木で手桶を作っている木工芸品屋、ほうきなどを作っている家、クリーニングを担当している東側洗濯室、その他鍛冶屋など

を視察したが、いずれもプロの技である。家具などは現在でもヨーロッパの王宮で使用されているようなデザインである。

家族住居センターは4階建てになっており、約80人の方が住んでいたという。シェーカーの信仰により、男女の営みは禁止されていて、男女両側に分かれ兄弟姉妹として住んだところである。男女それぞれ台所、寝室、地下貯蔵室、大集会場があり、医療室は病気の人を家族から隔離していた。最後に残った方は、1923年に亡くなったそうであるが、どういう訳か、いまだに5人の子孫が別の場所で暮らしているとのことである。

最後にミーティングハウスでミサらしきことがあるということで、視察したが、声量たっぷりのすばらしい歌とシェーカーダンスが披露され、シェーカーの意味がすこし解ったような気がした。

これらの施設は、教育公益事業団のケンタッキープレザントヒルシェーカータウン会社が経営しており、入場料が維持費に充てられている。

いろいろな職種のプロ集団が、宗教とはいえ子孫を残さなかったのは、非常に残念である。

わが国の少子化はますます進行の一途をたどり、国家存亡の危機に陥らぬよう、田原市議会も一層の努力と活動が必要と感じる。



シェーカーの住んでいた建物

【トヨタ自動車インディアナ工場視察】10月12日：PM

ケンタッキー州ジョージタウン市からインディアナ州プリンストン市まで車で高速道路を走ること約3時間。車窓から見える風景は農場や刈取りの終わったトウモロコシ畑等ばかりであった。移動中経度15度おきに設けられた標準時（アメリカでは4種類ある）を通過し、ジョージタウン市とは1時間の時差がある。

トヨタ自動車インディアナ工場（TMMI）では岡本社長以下首脳陣の方々の出迎えを受け、工場の説明並びに工場内の見学をさせていただいた。

TMMIは、インディアナ州の南西部に位置し、敷地は3キロメートル×1.5キロメートルと広大であり、その敷地内に西工場とその後増築により建てられた東工場とが立地している。この工場では従業員約5,500人、6車種が生産され、年間生産台数36万7千台で主に北米で販売され、売上高は約1兆円であるという。



TMMIの幹部の方よりレクチャーを受ける

トヨタは1998年12月にこの地に進出し、トヨタ田原工場をマザー工場としている。今も多くの人たちがこのTMMIに幹部として工場の支援要員として出向いている。進出後6年の歳月の中で、部品の調達力は60%が現地化され、さらに来年には70%になるとの話があった。その要因として、64号線（現地ではトヨタ通りと呼ばれている）沿いに関連会社が進出し、工場から80マイル（約130キロメートル）以内に立地して協力をいただいている

との説明を聞き、企業のグローバル化の一端を垣間見た感じがした。

工場内見学で田原工場との違いは、女性社員の多さ（社員の約25%）と作業内容が男性と変わらない職務についていることがあげられると思う。大型リフトの運転や女性では難しいと思われる仕事も自然とこなしているのを見ると、今の日本の実態は？と考えさせられた。

また面白いと感じたのは、賞与を6つの基準から決めているが、その中に出勤に関する項目があり、それが大いに出勤率に貢献している実態を聞き、日本との労働意識の違いを感じさせられた。

今、日本の製造業はアメリカの企業がそうであったように、世界各地に進出あるいは進出せざるを得ない状況になっている。今回のTMMIの視察によって、それを認めざるを得ない状況を感じた。

売れる場所に近い所に工場をつくり、その周りに協力会社が進出していく。それは

自然のことであり、流れであると思う。TMMIの岡本社長はここでの生産は手一杯という。その要因は、もうこの地では優秀な人材の確保が困難であるときっぱり述べられた。その言葉を伺ったとき、トヨタの海外生産は場所を変えてまだまだ続く。そして日本からの人材流出も。

【インディアナ州プリンストン市表敬訪問】10月13日：AM

田原市と友好都市提携をしているインディアナ州プリンストン市を表敬訪問した。

ここプリンストン市は、アメリカ北東部インディアナ州の南部に位置し、人口約9,000人の小さな町で、約32,000人の人口をもつギブソン郡の郡庁所在地でもある。行政面積は、田原市が106.40平方キロメートル、プリンストン市が6.4平方キロメートルで面積自体を見ても規模の小さいのが理解できる。

ところが畑の広さ、トラクターの大きさなど、スケールの大きさに圧倒されてしまいそうになった。まさに農業主体の町である。その中において、工業はトヨタ自動車インディアナ工場（TMMI）を中心に、その他自動車製造業関連の日本企業も多く進出し、変貌しつつあるプリンストン市であった。

訪問の目的であるロブ市長（女性）にお会いし、視察団の団長より表敬訪問のあいさつをし、田原市長のメッセージを伝えた。またロブ市長からも我々一行に対して温かい歓迎のあいさつがあった。特に副団長で前議長の川口完一議員とは友好都市提携時にお会いして以来の訪問であったため、懐かしさと嬉しさがいっぱいの表情で我々視察団を市庁舎内で温かく迎えてくれた。



プリンストン近郊の道路



プリンストン市庁舎内にて（下段右より3人目ロブ市長）

その後、プリンストン地区商工会議所エグゼクティブ・ディレクターのヘレン・ホークさん（女性）の案内で郡庁舎を視察した。

庁舎内では総務、財務、教育といった部署を案内していただいた。特に庁舎の3階に裁判所があり、その日も裁判を受ける人が20人程度並んでいて、手錠と足かせをした容疑者（警察官同伴）も一

緒に並んでいた。日本では到底考えられないアメリカ文化の一端を見た。

【プリンストン市内の高校視察】10月13日：AM

我々視察団はヘレンさんの配慮でアポなしで高校を視察することができた。

学校は郡の管轄となっていて、ギブソン郡を北部、南部、東部の地域に分けて、それぞれに教育委員会を置いている。プリンストン市は北部の教育委員会に属し、教師については、インディアナ州の資格で管理している。北部は、小学校2校、中学校1校、高校1校である。また、プリンストンの修学制度は、小学校6年制、中学校2年制、高校は4年制である。

今回視察した高校の一クラスの生徒も、25人と田原市内の高校と比較すると、かなり少ない数である。教育費については、ギブソン郡全体の予算の2/3を充当しているという。教育にかける意気込みは大変なものがあると感じた。また、敷地の広さ、校舎の大きさ(平屋)、ゆとりのある広い廊下に驚いた。



プリンストン市内の高校の授業を視察

授業もを見せていただき、授業時間は1日7時限で、1時限が47分となっ

ている。授業のカリキュラムも自由に選択でき、日本の高校との違いを実感した。

生徒たちも大変明るくあいさつができ、とても気持ちの良い視察でした。

【ニューヨーク市の高齢者福祉視察（ヘブライ・ホーム）】10月14日：AM

日本における介護保険は導入から5年目を迎え、はやそれを支える保険金のあり方が問われている。

そこで今回、介護の先進地であるヘブライ・ホームを視察した。

当施設は、大都会ニューヨーク市内にあるのに周りは緑、横にはきれいな川が流れ、環境については最高の場所にある。

我々一行は、施設の玄関にてディレクターであるスーザンさんの出迎えを受けた後、会議室で彼女からこの施設全体のレクチャーを受けた。



スーザンさんから施設の概要を聞く

この施設は、1917年にユダヤ人ジェイコブ（Jacob）氏により、ニューヨーク市ハーレムにおいてユダヤ人のための施設として設立された。その後1950年にリバーデールのこの地に移設され、現在では、ユダヤ教は重んじてはいるが他宗教の入所も受け入れていて、入居者は784名となっている。

入居者の平均年齢は85歳であるが、入居資格は65歳からで地域のコミュニティーを基本として5つのセクションからなっていて、他にも2カ所施設がある。

この施設の特徴は、入居希望者あるいはその家族は電話にて入居申し込みをすると、施設側において入居者の全ての状況を確認し、何が必要なか把握できる仕組みとなっている。入居すれば担当医が決定され、介護のメディカルチーム（様々な技能を持った人々）が充てられ、その後必要なプログラムが決まり、その人にふさわしいサービスを受けることができる。また、自立して生活できない人には、隣接した場所にアパート（ホテル風）があり、そこで生活しながら介護のサービスを受ける事ができるようになっている。当初は集団生活が望ましいと考えられていたが、今では85歳からは部屋をシングルとしているとの事。

他に博物館も経営しながら医療に役立てていて、施設や博物館で所有している絵画等を展示して、入居者の心を癒す役割を果たしている。特に運営のあり方も、今は病院の施設ではなく、個人が楽しめるようなコミュニティーの雰囲気を楽しめる個人対応へとシフトしているとの事。

そこで気になる入居費用であるが、1日350ドル～600ドルと非常に高く、「それに耐えることができるのか。」と質問すると入居者の多くは3年くらいでお金がなくなり、メディケア（個人負担）から国の保障制度（国の決められたサービス）メディケイドに変わっていく例が多いらしい。

国の補償（補助金）については、サービスが高ければ補償も高く、また入居率が高いほど補償が得られるという。この施設は非営利団体が運営しており、多くの企業や人々の寄付で成り立っているため、職員のライセンス取得に対する支援や、入居者に対する高いサービスを行うことが非常に大切な事となっている。

当然高校生ボランティアを受け入れていて、お話し相手、介護の手伝いを主に学校の単位取得にもなっている。

施設の隣の高齢者用アパート（ホテル風）もあり、家族もその中で泊まる事がで



スーザンさんを囲んで（ホームの前にて）

き、またパソコンのウェブ上でも入居者の状況を見ることもできるようになっている。

スーザンさんによれば、4・5年前には日本の多くの役人がこの施設を訪れたとのこと。それは、今の日本の介護保険制度にかなり参考にされているのではないかとと思われる。

最近では、ナイトプログラムに力を入れているということなので、現場を見させていただいたが、その内容は、痴呆症の入居者に対し、朝まで様々な催しをして徘徊しないようにするサービスみたいだ。日本においても、今後このようなメニューは必要になるかもしれない。

今回の視察について率直な感想を述べると、高齢者福祉にはそれを支える多大な人と費用がかかるということである。この施設においても、2,000人の職員が支えており、784人の入居者1人に対し1.5人の割合で職員がかかっている。また費用に対しても、月に入居者が支払う金額は100万円～200万円と高額であり、私たちが考えうるレベルを超えている感じがした。

直に迎える高齢社会を満足して暮らせる福祉の仕組みづくりを考える時、日本は日本としての良さを生かした仕組みづくりの充実が望まれるのではないと思う。

【スーパー視察(スチュレオナード 3号店)】10月14日：PM

ニューヨークで成功しているというスーパーを視察した。

そのスーパーは、ハイウェイのすぐ横に位置し、条件的には良い場所にあった。入場すると、品選びをするフロアー（歩道）は広く、また両側に見やすく棚が設置して



スチュレオナード3号店の外観

あり、品数も豊富でゆったり陳列してあった。その歩道は一方通行のようでもくもくとなっており、野菜があったら肉屋、魚屋、酒屋、菓子屋、惣菜屋、パン屋などなど、どこが切れ目かわからない。

更に、所々に動く人形やフロアーのセンターなどに、子どもが好みそうなお菓子やおもちゃなどが置いてある。ただ、買い忘れた場合どうするのか？どこか抜け道があるのかな？とってしまった。

高い、安いはわからない。ただ、日本のようにラップ（包装）してあるような、無駄な包装はない。

日本で、この方式ができるかという、場所が広くないと無理なところもあるかと思う。かごに入れてから、いらなくなって返そうとしても戻らなければ返せないの、その点では、おもしろい方式かもしれない。

隣のブースには、ガーデニングの材料が置いてあったり、精算をバーコードでしている点など、日本と共通する部分が多かった。



店内にある子どもの喜びそうな動く人形

【ニューヨーク市の街づくり視察】10月14日：PM

ニューヨークはバスにての視察ではあったが、車が多く流れも多いため、車の運転には大変勇気のいる運転技術が必要である。

ニューヨークの住民は本来200万人で、昼間は他の州から就労者が集まり、1千万人を超すといわれている。特にマンハッタン島では、世界の証券価格をリードする市場が開かれている。



ロックフェラー・センター

島内の街並みは、高層ビルと縦横に走っている地下鉄の古い橋脚がやけに目にとまり、街路樹はあるものの、緑はほとんどなく、癒されるような街ではない。この街には古い建物も多く残され、今もそのまま使われている。地震がないため、建替える必要がないという。歩道にはゴミこそないが、色合いもなく飾りもない殺風景な様相であった。

道路は碁盤の目のように仕切られていて、通り名は交差点に、番地は各建物に表示されている。南北に走るアベニュー（街）は東から1番街、2番街 となっており、東西に走るのはストリート（丁目）で42丁目、43丁目 となっていて分かりやすい。区割りがしっかりできていて、慣れれば間違えることはないようである。

ロックフェラー・センターはオフィスビルなど21の高層ビルからなる。また、エンパイア・ステート・ビルは、マンハッタンの中心に立つ86階のビルで、ニューヨークのシンボルとなっている。

国連本部は、低いドーム型の国連総会ビル、39階建ての国連事務局タワー、川に面した低い長方形の会議場、ダグ・ハマースホルド図書館の4つの建物から構成され

ている。

2001年9月11日、同時多発テロにより世界貿易センタービルに航空機が衝突した跡地のグラウンドゼロでは、柵の外から30分程度視察したが、当時の柱が十字架状に1本残してあった。

また、悲惨な事件で亡くなった人々の名前が刻まれたプレートも展示されていた。復興作業は建設計画がまとまらないのか、様子はいかがでなかった。片側はすぐ大西洋で、高いビルもない状況なのでテロの標的になったのだろう。現地へ行って理解できた。

特にブロンクスという地区は、古いビルやアパートなどは解体されてはいるものの治安は良くない。ずいぶん少なくなったとのことであるが、時折パトカーか救急車のサイレンが聞こえた。

我々の田原市も、犯罪や事件が急増している中で、治安の問題をもう一度見直すことも必要である。



テロに遭った世界貿易センタービル跡
(グラウンドゼロ)

【トロント市の街づくり視察】10月15日：PM



カナダトロント市庁舎前にて

当日は朝4時起床、5時出発という強行軍で、おまけにあいにくの雨であった。デトロイト空港からトロント空港へ向かう飛行機は、低気圧の関係で揺れに揺れ、雲の中を抜けたと思ったらすぐ着陸となり、雨のトロント空港を体験した。

視察団一行は、早速トロント市庁舎を訪問、市庁舎内を視察した。近代的な建物で目玉をモチーフに釘を使った壁画の玄関ロビー、日本では物の配置や効率化を優先し

ているため、ゆとりの空間が少なく感じさせるが、その場に立つとゆったりとした気持ちを感じた。空間の造り方次第で、庁舎を訪れた人が「気が休める」空間と感ずるよう配慮も必要である。

その後、オンタリオ州議会の議事堂（古い様式の建物）を見学し、大英帝国時代の貴賓ある風情が漂ってきた。

トロント市の地価は、東京・大阪・ニューヨーク・パリに次いで世界で第5番目に高い地価となっているのが現状である。そうした中で、今トロント市内では住宅の開発が進み、高層マンション（コンドミニアム）が市中心部から郊外にかけて建設されていた。

また、カナダ政府は先の香港が中国への返還に先立ち、香港からの移住者の受け入れを積極的に進めた結果、このトロント市も10年計画で900万人にする計画が出され、ニューヨーク市に匹敵するくらいの世界都市を目指している。

トロント市内の一角に、18世紀に建てられた古い建物のトロント大学があり、48,000人（夜間生も含む）の学生が学んでいる。そして、1923年にはこのトロント大学の学生2人が、糖尿病の治療薬であるインシュリンを発見（開発）し、ノーベル賞を受賞したという歴史もある。日本でいえば東大というところであろう。



高層ビルが建つトロント市街

大学の構内をしばらく行くと、アジア系の学生が目立つ。そこで声をかけてみると、中国からの留学生だった。我々一行も学生の方から声をかけられたが、学生は我々が日本人と知って残念がっていた。

今やカナダは、アジア系を含む有色人種も数多く見受けられ、一層のグローバル化が進んだ国、カナダのトロント市であった。

【ピリテリー農場視察】10月16日：AM

トロント市内から車で約1時間半の距離にあるピリテリー農場は、五大湖の一つであるオンタリオ湖のほど近くにあった。この地域では、ぶどうばかりでなくりんご、さくらんぼ等の果樹園も見られたが、野菜はほとんど栽培されておらず、直接アメリカより仕入れた方が安いとのことであった。

この辺りでワイン用のぶどうが多く栽培されるようになった理由に、土地が広大でしかもフラットである点と、オンタリオ湖から吹き込む風を受け温暖で適度な湿気を持ち、真冬には気温がマイナス10 ~ 20 まで冷え込み、ぶどう栽培に大変適していたことにある。



一面に広がるアイスワインのぶどう畑

ピリテリー農場では、150エーカー（約60ヘクタール）の土地にアイスワイン用に2種類のぶどうが栽培され、年間約220キロリットルのアイスワインが醸造されている。

アイスワインは、この地方で作られているワインで、その作り方には特徴がある。厳しい寒さでぶどうが氷結し、それを一気に収穫し、一気に絞る。水分と果糖エキスの氷点が違うため、マイナス8～15

で氷結したぶどうは、果実の中の水分は凍っているが、果糖は凍らない。これを搾ると水分は凍っているので液体にならず、天然エキスの果糖はポタポタと液体になって出てくる。この果糖エキスだけを醸造したものが、アイスワインである。アイスワインのアルコール度は平均10%前後、果糖度は平均40～42%前後である。

普通のワインに使われるぶどう栽培に比べ、収穫時期を遅らせ、マイナス10の日が1週間以上続いた1日で気温の最も低くなる真夜中に手で丁寧に収穫される。

ぶどうの水分をできるだけ除き、気温が冷え込むこの時期まで収穫を遅らせることは、鳥害対策のためのネットを張るなど、大変な管理が必要である。もちろんぶどう栽培においては収穫まで無農薬である。

多くの手間と時間をかけて栽培され、そして収穫されたぶどうは、果汁を搾られ樽に詰められた後、地下室において3月から2年間発酵・熟成される。どの工程においても少しの手抜きも許されない厳しいものであり、こうして生成されたワインの味は絶品である。

我々も仕事をするうえで、厳しくつらいものに直面するとすぐに妥協し、ことをすまそうとすることが往々にしてあるが、手抜きしないよう気を引き締めていきたいものだ。

田原市は渥美町との合併を控え、やがて農業算出額700億円を超す一大農業生産地となるが、量だけでなく質ともに日本一の自治体となるよう、生産者は常に探究心を忘れず誇りと自信をもって生産していただくことが大切ではないかと思う。



地下室にねむるアイスワインの樽

【ナイアガラの滝視察】10月16日：PM

ナイアガラの滝は、世界三大瀑布（南米のイグアスの滝、アフリカのビクトリアの滝）の一つで、五大湖のひとつエリー湖からオンタリオ湖へ下るナイアガラ川の途中



水煙をたちあげ地響きを轟かせて流れるナイアガラの滝

にある。滝の直前にある島で二分され、アメリカとカナダの2カ国にまたがって落ちている。

カナダ滝は幅675メートル、落差54メートル、水量毎分1億5,500万リットルで、ナイアガラの滝の全水量の9割を占める。中央部が半月上になっており、馬蹄滝とも呼ばれる。

アメリカ滝は、幅320メートル、落差56メートル、水量毎分1,400万リットルで、滝の高さはカナ

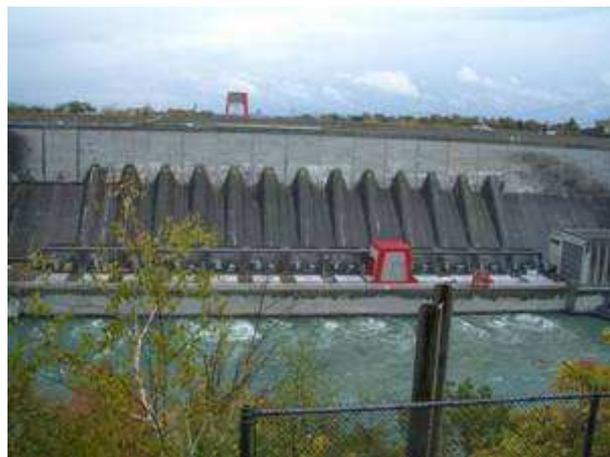
ダ滝よりも2メートル長い。

滝の侵食は今も続いているが、その侵食を最小限にするためにカナダ滝は、滝からやや上流に設置されたコントロールゲート（水門）で水量を調整しており、アメリカ滝は滝つぼを埋めている岩で防がれている。

1950年にアメリカとカナダの間に締結された「ナイアガラ水路変更に関する条約」によって滝の最低水量が確保され、残りの水はアメリカとカナダで等分されて水力発電に利用されている。発電量は370万キロワットで、黒部ダムの発電量（50万キロワット）の7.4倍にも達するという。

この滝を近くで見るための遊覧船が出ていて、ビニールのカッパを着て乗船するが、それでもずぶ濡れになった。

圧倒的な水量による轟音、風、霧などそのスケールの大きさには驚かされた。



カナダから望むアメリカ側の水力発電所

田原市議会海外行政視察日程表

日次	月	日	曜日	都市名	交通機関	時間	行程表	食事	宿泊
1	10月	10日	日	名古屋	NW-72	13:20	空路ノースウエスト航空にてデトロイトへ (日付変更線)	機内 機内	機内泊
				デトロイト レキシントン ジョージタウン	NW-5893 専用車	11:55 13:35 14:53 夕刻	デトロイトにて入国手続き後、国内線に乗り換え レキシントンへ レキシントンより専用車にてジョージタウンへ ジョージタウン到着後ホテルへ		
2	10月	11日	月	ジョージタウン	専用車	午前 午後	スポーツ施設視察 ジョージタウン市表敬訪問 ジョージタウン市商工会例会出席(11:45から) 日本庭園視察 シェーカービレッジオブリーザントヒル視察	朝食 昼食 夕食	ジョージタウン コンフォートスイーツ
3	10月	12日	火	ジョージタウン	専用車	午前	専用車にてプリンストンへ移動	朝食 昼食 夕食	プリンストン フェアフィールドイン
				プリンストン	専用車	午後	TMMI(トヨタモーターマニュファクチャリングインディアナ) :トヨタ自動車インディアナ工場視察		
4	10月	13日	水	プリンストン	専用車	午前	プリンストン市表敬訪問 市内高校視察	朝食 昼食 夕食	ニューヨーク ウォルト・ルファストリア
				イヴァンズビル デトロイト ニューヨーク	NW-5806 NW-536	14:00 16:25 17:00 18:44	空路デトロイトへ デトロイトにて乗り換え 空路ニューヨークへ ニューヨーク到着後ホテルへ		
5	10月	14日	木	ニューヨーク	専用車	午前	ニューヨーク市の高齢福祉視察 (ヘブライ・ホーム)	朝食 昼食 夕食	ニューヨーク ウォルト・ルファストリア
						午後	ニューヨークの町づくり視察とスーパー視察 (グラウンドゼロ、国連ビル、エンパイアステートビル等 とステューレオナード3号店見学)		
6	10月	15日	金	ニューヨーク デトロイト	NW-420 NW-1498	07:26 09:16	空路デトロイトへ	朝食 昼食 夕食	トロント シェラトンセンター
				トロント		10:32 11:35	乗り継ぎ空路トロントへ 到着後トロント市の街づくり視察		
7	10月	16日	土	ナイアガラオンザレイク	専用車	終日	オンザレイクにて農場視察(ピリテリー農場) ナイアガラの滝視察	朝食 昼食 夕食	トロント シェラトンセンター
8	10月	17日	日	トロント	NW-1505	午前	専用車空港へ	機内	機内泊
				デトロイト	NW-71	12:40 13:57 15:45	出国手続き後空路ノースウエスト航空にて デトロイトへ 乗り継ぎ後、帰国の途に		
9	10月	18日	月	名古屋		18:10	名古屋空港到着後解散	機内	

田原市議会海外行政視察団名簿

役職名	氏 名	党派別	備 考
視察団団長	いよだ のりやす 伊与田 知養	無所属	田原市議会副議長
視察団副団長	かわぐち かんいち 川口 完一	無所属	
	やすだ ゆきお 安田 幸雄	無所属	経済建設委員長
	わたなべ のぶゆき 渡辺 延幸	無所属	
	つばき じつじろう 椿 実治郎	無所属	監査委員
	ひこさか ゆうぞう 彦坂 雄三	無所属	総務副委員長
	とみだ ひでほ 富田 秀穂	無所属	文教厚生副委員長
	まつみ きよし 松見 清	無所属	経済建設副委員長
	まき しょうご 眞木 正五	無所属	
田原市議会 事務局 長	とみだ みよし 富田 美義		

編 集 後 記

我々、田原市議会海外行政視察団は姉妹都市ジョージタウン市をはじめ、プリンス
トン市を含む9日間の視察の全日程を終了し無事帰国した。

田原市の姉妹都市スコット郡ジョージタウン市においては、バーニー市長の歓迎を
うけ、友好の絆が一層強くなったような気がする。同時に中学生はもとより将来我が
田原市を築く高校生、ひいては大学生の交換留学がもっと頻繁にでき、グローバルリ
ーダーシップがとれる人材を育てるためにも、市民、行政、企業が一体となって環境
の整備をする必要があると感じた。

ギブソン郡プリンストン市においてはロブ市長をはじめ、郡関係者の方々にも大変
お世話になった。今後両市民の交流が活発になり友好の輪がさらに広がるよう、我々
議会としても働きかけていきたいと思う。

視察の中に、老人福祉施設を訪問させていただいて、我々田原市についても考える
べきところは多々あったと思う。

田原市にも押し寄せている少子高齢化の波は、誰しもが感じているところであり、
高齢社会の進む中で、将来の不安が先に立ち「夢」「希望」がなくなっているのも
事実である。

こうした不安をなくすためにも議会としてどうあるべきか、何をどうすべきか再度
考える必要があると思う。

今後この視察をもとに、市行政に反映できるところは積極的に反映し、見直すところ
は徹底的に提言、提案していきたいと考えている。

最後に、この視察が内容的にも日程的にも非常にハードであったことを余談として
追記し、報告とする。

海外行政視察報告書
(アメリカ・カナダ)

平成16年12月

編集／発行 田原市議会海外行政視察団